## 2．事例を通して考えてみる　～図画工作科（4月）～

1　題材名「すきなもの いろいろ」

2　本題材につながる幼児期の子どもの姿

幼児は、園生活の様々な場面で、不思議さや美しさなどを感じ、心を動かしている。そのような心の動きを自分なりに表し、教師や友達に受け止められ、さらに表現することを楽しむようになる。また、体験したことなどをかいたり、様々なものをつくったり、それを遊びに使ったり、飾ったりして楽しんでいる。

例えば、丸をかいて「ぶどう」と教師に見せ、教師がそれをおいしそうに食べるふりをすると、様々な色で丸をかき、食べ物に見立てて楽しむ。遊びに必要なものができると、素材や用具の置いてある場所に行き、色や形、質感などを選んでつくり、そこに模様などをかいて大切に使う。親しみをもって世話をしている生き物を友達と一緒にかいているうちにお話が生まれ、思い付いたことを伝え合いながら自由にかき足していく。

このように、幼児は表現したい思いや遊びの中での必要性から、自分のつくりたいもの、かきたいもののイメージがはっきりしてきて、そのイメージに合った素材や表現の仕方を考えるなど、工夫して楽しむようになっていく。

3　題材について

（1）題材の目標 自分の好きなものや好きなことから表したいことを見付け、表し方を工夫して絵に表す。

（2）題材の指導計画（全2時間）

| | ○主な学習内容　・学習活動 |
|---|---|
| 1，2 | ○自分の好きなものや好きなことを思い浮かべ、表したいことを見付ける。<br>○好きなものや好きなことの形や色を考えながら、画用紙やクレヨンやパスの色を選ぶ。<br>○手や体の全体の感覚などを働かせ、好きなものや好きなことをクレヨンやパスを使って工夫して表す。 |
| | ○自分や友達の作品を見て、面白さや楽しさを感じ取り、自分の見方や感じ方を広げる。 |

4　本題材におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、心を動かす出来事などに触れてイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ中で身近にある素材の特徴や表現の仕方などに気付き、自分なりに工夫して表現する楽しさを味わっている。また、友達と思いなどを伝え合い、イメージや考えを広げながら遊びを進めていく体験もしている。本単元では、子供の好きなことや好きなものなどについて、話をしたり聞いたりして、楽しい気持ちでかくことができるようにしたい。

# 2．事例を通して考えてみる　～4月　スタートカリキュラム　図画工作科～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

5　授業の実際（本時1，2／2）

（1）本時の目標

自分の好きなものや好きなことから表したいことを見付け、表し方を工夫して絵に表す。

（2）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

| 主な学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| みんなの好きなものは何かな？絵に表してみよう。 | |
| ○自分の好きなものや好きなことをかく活動に興味や関心をもつ。<br>友人の発言をきっかけにして様々な体験や経験を想起し、表したいことを見付けられるようにする。 | ○「みんなの好きなものは何かな？」と問いかけ、それぞれの子供が好きなものや好きなことを思い浮かべられるようにする。<br>○子供の言葉を、動物、食べ物、乗り物、植物などに分けて板書し、それを見ながら発想できるようにする。 |
| 画用紙の大きさや、クレヨンやパスの色を選んで、工夫して絵に表そう。 | |
| ○自分の好きなものや好きなことの形や色を考えたり選んだりしながら、画用紙の大きさやクレヨンやパスの色を選ぶ。<br>○思いのままにかいたり、色を付けたり試したりしながら，クレヨンやパスなどを使って、表し方を工夫してかく。<br>「かくことが楽しい！」という気持ちを基にいろいろな形や色を選んだり、考えたりしながら、どのように表すかについて考えられるようにする。 | ○画用紙は小さく切ったものを用意し、何枚もかけるようにし、かきたいものを次々と思い浮かべかくことを大切にする。<br>○かいた絵を見ながら、好きなものや好きなことについての話を聞き、さらに表したいことを思い付き、絵に表すことに主体的に取り組めるようにする。 |
| 友達の作品を見てみよう。 | |
| ○絵に表した自分の好きなものを紹介したり、友人のかいた絵の楽しいところや面白いところを話したりして、自分たちの作品を楽しく見る。<br>友達の作品から感じたことや考えたことなどを自由に話し合い、その面白さや楽しさ、表し方などについて自分の見方や感じ方を広げられるようにする。 | ○グループの中で見合ったり、学級全体で見合ったりする。学級全体で見合う場合は、かいた絵を机の上に並べ、作品を見やすくする。 |

## 2．事例を通して考えてみる　～体育科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

1　単元名「みんなで　あそぼう」

2　本単元につながる幼児期の子供の姿

幼児は、走ったり、跳んだり、転がったり、ぶら下がったり、投げたり、好きなものになりきって動いたりといった自分の体を動かすことが好きである。園にある遊具や用具に興味をもったり、教職員や友達の動きに誘われたりして、次第に全身を動かし、その楽しさや心地よさを味わうようになる。そして、「できるようになりたい」と自分なりの目標に向けて取り組む中で、教職員や友達の動きをよく見てまねたり、やり方を聞いたり、応援されたりしながら繰り返し挑戦し、やり遂げる達成感を味わうようになる。

また、友達とルールのある遊びを楽しみ、競ったり協力したりして自分たちの力を発揮するようになる。さらに、様々な遊びにおいて、その遊びが楽しくなるように考えを出し合いながらルールをつくったり変えたりもするようになる。

3　単元について

（1）単元の目標

関わり合いながら行う手軽な運動をしたり、固定施設を使って自分の体を動かしたりすることを通して、運動遊びの仕方を知り、楽しく遊ぶことができる遊び方を選ぶとともに、場の安全に気を付け、友達と仲よく取り組むことができる。

（2）単元の指導計画（全４時間：体つくり運動２時間・固定施設を使った運動遊び２時間）

| | ○主な学習内容　　・学習活動 |
|---|---|
| １～２ | ○関わり合いながら行う手軽な運動をする。<br>・「だるまさんがころんだ」や鬼遊びなど、幼児期に親しんできた遊びや活動（伝承遊びや集団による運動遊び）を楽しむ。<br>○いろいろな登り下りやぶら下がり、懸垂移行、渡り歩きや跳び下りなどをする。<br>・ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、いろいろな動きをして遊ぶ。 |
| ３～４ | ○用具などを用いた運動をする。<br>・ボール挟みリレー、フラフープ送り、ゴム跳び遊びなど、伸び伸びとした動作で用具などを用いた遊びや活動を楽しむ。<br>○いろいろな登り下りやぶら下がり、懸垂移行、渡り歩きや跳び下り、逆さ姿勢などをする。<br>・ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、工夫した動きをして遊ぶ。 |

４ 本単元におけるスタートカリキュラムの指導について

幼児期には、遊びや生活の中で自分のしたいことに向かって、心と体を十分に働かせること、見通しをもつこと、自分たちで進めること、やり遂げることで自信をもつことなどを体験している。また、友達と共通の目的の実現に向けて、考えなどを共有し、工夫したり協力したりなどもする。このような経験や入学直後の施設への関心を生かし、友達と関わり合う活動や遊具を使って遊ぶ活動を取り入れ、協力して目的に向かう喜びを味わうことが大切である。その際、安心して取り組むことができるように、幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れたり、経験してきたルールやきまりを想起したりして、体つくり運動に取り組むとよい。このような運動の経験が、休み時間などの遊びにもつながり、友達と過ごす学校での生活を豊かにしていく。

# 2．事例を通して考えてみる　～体育科（5月）～

文部科学省国立教育政策研究所編著　「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム　スタートカリキュラム導入・実践の手引き」

5　授業の実際（本時２／４）

（１）本時の目標

関わり合いながら行う手軽な運動や固定施設を使った運動遊びをすることで、いろいろな動きをすることができる。

（２）本時の展開【吹き出しはスタートカリキュラムの指導のポイント】

| 主な学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| ○遊びながら運動に向かう準備をする。 | ・体でじゃんけんをしたり、動物や忍者になりきって動いたりするなど、楽しみながら体を動かすことができる遊びを取り入れる。 |
| ○「だるまさんがころんだ」や簡単な鬼遊びなど、幼児期に親しんできた遊びや活動（伝承遊びや集団による運動遊び）を楽しむ。<br>広い校庭に不安を抱く児童もいる。新しく出会った施設を実際に利用することで、安心感が生まれる。 | ・本時にしたい遊びや活動を出し合うために、前時を振り返る。<br>・幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れて、安心して運動できるようにする。<br>「こんなときはどうしていたの？」などと問い掛ける。困ったことも自分たちで解決していくという自覚を生む。<br>・園によって経験してきた遊びや活動が異なるので、ルールを話し合う活動などを適宜行う。<br>・誰もが楽しんだり友達との関わりを増やしたりするために、遊びの工夫を教師から提案することも考えられる。<br>・教師も児童と遊びや活動を楽しんだり、輪に入ることが難しい児童と一緒に取り組んだりする。 |
| ○ジャングルジムや鉄棒、雲梯、登り棒などの校庭の固定施設を使って、いろいろな動きをして遊ぶ。 | ・固定施設を使って遊ぶ時の楽しい遊び方、ルールやきまり、してみたいことを出し合う。<br>・児童が気付いていない安全面での注意事項は、教師が分かりやすく端的に示す。<br>・ほかの児童が行っていない動きをしている児童を褒めたり紹介したりして、いろいろな動きを引き出したり広めたりする。<br>実際の遊びや活動を通して、ルールやきまりを実感的に理解できるようにする。<br>・固定施設に苦手意識をもつ児童には、教師が一緒に遊んだり友達同士で遊べるよう声を掛けたりする。 |

## ２．事例を通して考えてみる　～要録を作成し、小学校教育へつなげる～

「指導と評価に生かす記録（令和３年１０月）」３章　事例３概要（一部修正）

日々の記録を基に、幼稚園教育要領等に定めるねらいから幼児の成長を捉え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、小学校の先生にもわかりやすく要録を作成し、小学校教育へとつながるようにした。

５歳児のA児の担任は、日々の記録を基に、以下のように要録の＜指導上参考となる事項＞欄に記入する内容をまとめた。

一学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。次第に体力がつき、運動的な遊びに自信をもつようになった。しかし、自分でやりたいことよりも仲の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、三学期には、自分からやりたいことを伝えたり、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られるようになった。

まとめた内容が小学校の先生にわかりやすく伝えるものとなっているか、以下の視点から検討した。

視点①：「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や育まれている資質・能力を意識して捉えられているか

日々の記録からはA児が気持ちを切り替えて友達と遊ぶ姿を多く読み取れるが、担任がまとめた要録にはそれが表れていないのではないかとの意見がでた。そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から記述を見直し、A児の一年で育っている姿を再認識した。

視点②：指導の過程を記しているか

日々の記録に書かれている「自分が考えたことを一人で自信をもって言うことができなかった姿」も加えた方が、幼児の変容がよく伝わるだろうとの協議がなされた。

視点③：小学校での指導に生かすための育ちつつある姿を記しているか

小学校で引き続きどのようなことに配慮して指導すべきかが伝わりにくいとの意見がでた。そこで、自分の気持ちや考えに自信をもった表現をしようとしている姿について丁寧に記すことにした。

## ２．事例を通して考えてみる　～要録を作成し、小学校教育へつなげる～

「指導と評価に生かす記録（令和３年１０月）」３章　事例３概要（一部修正）

協議を踏まえ、下線部分を追記し、より指導の過程や幼児の育ちが伝わるものとなるようにまとめ直した。

一学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。進級当初は、嫌なことがあると気持ちを切り替えるのに時間がかかることもあったが、繰り返し運動的な遊びをすることで、友達との関わりを楽しみ充実感を味わうようになってきた。また、ルールのある遊びの中で、友達と作戦を考えたり役割分担をしたりしながら楽しんできたことで、自信をもって行動するようになった。（視点①）

自分が考えたことを一人で自信をもって言うことができない姿（視点②）や、自分でやりたいことよりも中の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、三学期には、自分の考えたことを自分なりの言葉で表現したり（視点③）、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られ、表現することへの自信が生まれてきている。（視点③）

この事例を通して、次のことがわかった。

○　小学校で引き続き伸ばしてほしいことや今後の指導に生かしてほしいことを分かりやすく記入することが大切である。
○　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして捉えることで、小学校の先生にも伝わりやすいものとなるとともに、先生の視点の偏りを確認でき、総合的に幼児の成長を伝えられることにもつながる。

また、小学校の先生からは以下の感想があった。

○「幼児期の終わりまでに育って育ってほしい姿」が現れるためには、先生方の言葉掛けや環境の構成など指導の積み重ねが大切である。
○幼児ができることやもっている力を理解した上で、１年生の指導を行うことが大切である。

## 2．事例を通して考えてみる　～園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援～

幼児教育と小学校教育の連携を基盤に、障害のある幼児などが、自己を発揮しながら安心して小学校生活を送ることができるよう、園から小学校へ支援の過程を丁寧に引き継いだ。

**○園と小学校の連携を基盤とした支援**

・　小学校入学前に、小学校の教室や校庭などを活用して、子供同士の交流を複数回行う。障害のある幼児などが、小学校の施設、教室、机などに触れることで、小学校での生活をイメージし、不安の軽減や期待感の向上につなげるようにする。また、児童や小学校の先生とも触れ合い、入学後に初対面の人ばかりではない状況となるようにした。さらに、当該幼児の遊びや生活の様子、園の先生の関わり方を見て、具体の支援について考える機会とした。

・　園では、お昼や片づけの時間などを活用し、時間に区切のある生活を体験する機会も設けるなど、小学校での生活を意識した園生活を取り入れた。小学校では、スタートカリキュラムとして時間割を柔軟にしたり、当該幼児が好きな遊びを取り入れた活動を展開したり、教室の掲示の仕方に園のやり方を取り入れたりするなど、園と小学校の環境の変化を小さくするなどの工夫を行った。

・　日頃から、園と小学校の先生が教育内容や先生の関わり方などに関する相互理解を深めてきたことで、当該幼児への支援の意図や具体の支援策について、共通のイメージをもちながら話し合うことができた。

**○就学先の小学校等への引継ぎにあたって**

①園の先生は小学校へ伝える情報を考えるために、小学校での生活や学習を理解する。例えば小学校では、

・児童の状態や教育的ニーズ等に応じ、通級による指導、特別支援クラスがあり、連続性のある多様な学びの場の整備がされている。

・通常のクラスに在籍していても、必要に応じて個別の支援（通級による指導など）を受けることができる。

・発達の程度や適応の状況、学校の環境等を踏まえて、柔軟に学びの場の見直しができる。

②園での幼児の様子や支援等を小学校へ伝える。

・　障害のある幼児などの実態や保護者の要望、園の施設設備や体制等を踏まえ、園での支援方針や支援内容を伝え、幼児への関わり方や今後の課題、必要な支援等について、園の先生と小学校の先生が一緒に考える。

・　得意なことや苦手なこと、園での1日の流れに沿ってどのような支援をしているのか、どのような時に不安を感じたり落ち着きをなくしたりするのか、そのような時にどのような支援をしていたのかなど、なるべく具体的に伝える。

・　障害のある幼児などの小学校での生活をイメージしやすいように、発達にあわせてどのようにスモールステップを設定し支援を行ってきたのかを説明をする。

## 2．事例を通して考えてみる　～園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援～

言語の遅れや知的の遅れなどが見られるダウン症のあるA児について、小学校の先生が具体的にイメージできるように、園での様子を説明した事例。

【園から小学校に伝えた内容の例】

| | |
|---|---|
| A児の特性や特徴 | ・人と関わることが好きで、皆と同じ場で過ごすことができるが、活動への参加は支援を要する。<br>・リズムにのって体を動かすことを好み、皆をまねて一緒に走ったり、追いかけ鬼に参加したりする。手先の力は弱く鉄棒などをつかむ、ボールを投げるなどの動きは難しい。<br>・自分の思いは表情や態度で表すことが多く、「いや」「だめ」と拒否するときは言葉で言い、手で払いのけたりふくれ顔をしたりして示す。本児なりに気持ちを切り替えようとしても、こだわりが強くなり切り替えられなくなる傾向がある。<br>等 |
| 幼児の成長の様子 | ○活動への参加について<br>・興味をもったことを途中で終わりにすることができにくい傾向があったが、クラスの皆が集まることを伝えたり、次のことへの見通しをもてるようにすると、気持ちを切り替えてクラスに戻れるようになってきた。<br>・協同製作などは、本児が出来ることで参加し、一緒に活動することを楽しんできている。<br>・乗り物ごっこ活動で、乗り物に乗るだけでなく、先生に促されると乗り物を押す役割を行えるようになってきた。<br>【配慮していること】<br>・クラスへの意識が育ってきているので、皆と一緒に活動する中で本児のできることで参加したり、できる役割をもたせたりして満足感がもてるようにした。<br><br>○自己表出・気持ちの切り替え<br>・「だめ」「いや」の拒否する言葉以外は表情と態度で示していたが、名前を呼ばれると返事をしたり挨拶をしたりするなど、少しずつ発語や語彙が増え、思いを伝えようとするようになってきた。<br>・自分の思い通りにならないときは、先生の誘いを拒んだり物から離れようとしなかったが、先生が気持ちを言葉で表し受け止めたり気持ちを満たす対応をすることで、気持ちを切り替えられるようになってきた。<br>【配慮していること】<br>・自分の思いを伝えようとする行為は増えてきているが、まだ言い表せない言葉も多く、先生が気持ちなどを代弁して幼児の語彙が増えるようにした。<br>・気持ちの切り替えがしやすいように、「まだ遊んでいたいね。でも○○の時間だから片付けようね。○○をしたらまた遊ぼうね」というように、先生が本児の気持ちを受け止めていることを伝えたりするようにした。 |

園から小学校に伝えた内容について、保育参観を通して、小学校の先生がA児が他の幼児と遊ぶ様子や興味のあること、好きな遊びの傾向や困難さを感じた時の様子などを観察した。

## ２．事例を通して考えてみる　～園小連携による障害のある幼児への切れ目ない支援～

【保育参観中のA児の様子】

A児は園庭で三輪車に乗って遊んでいる。片付けてクラスに集まる時間になるが、A児は遊びをやめることができない。先生が「片付けて保育室に戻ります」と声を掛ける（支援①）と、「いや」と言って三輪車を離そうとしない。再度「Aちゃん、片付けて保育室に戻りますよ。集まったら劇をするから」と声を掛けても（支援②）、「いや」と言い口をとがらせて怒る。そこで先生は、「そうか、まだ遊んでいたいのね。あと1周したら終わりにしよう」と言い（支援③）、三輪車置き場で待つことにした。その間「Aちゃん、速い」と声を掛ける。三輪車置き場の手前で誘導して、一緒に片付ける（支援④）。「Aちゃん、片付けるの上手」というと、A児が笑顔で保育室に向う。自分で靴を履き替えて保育室に戻ることができた（支援⑤）。

【保育参観後の話し合い】

A児の姿と先生の支援（①～⑤）について、その意図を小学校の先生に伝えた。

（支援①）今することを、個別に、かつ簡潔に伝えるようにしている。
（支援②）次にすることを知らせて見通しをもてるようにしている。
（支援③）片付けることだけを知らせると、片付けたくない気持ちが募り頑固になる傾向がある。起こって拒否する態度を、もっと遊びたい気持ちの表れと受け止め、１周乗ったら終わりにすることを提案することでA児が納得するようにしている。
（支援④）一緒に片付けることで、A児の気持ちがそれないようにしている。
（支援⑤）自分でできる身の回りのことは、自分で行う姿を見守っている。

この事例を通して、以下のことが分かった。

〇障害のある幼児などの実態に応じた支援が小学校に引き継がれ、安心して当該幼児が生活を送るためには、小学校の先生が、小学校での学習や生活の支援をイメージできることが大切。
〇園は、保護者の承諾を得た上で、これまでの幼児の様子や保護者の要望、園とのやりとりなどを、なるべく具体的に伝え、園と小学校の先生との意見交換の機会を設けることが重要。
〇障害のある幼児などはゆっくりと新しい生活に慣れていく。そうした様子を温かく見守り、継続的な支援をしていくことが大切。